



「童話作家に向かって」

新年もスタートしたら、あっという間に1月の半ばとなりました。3月12日の卒業式の日で「夢の宅配便」も終わりとなります。また、私の学年主任も終わりますので、8年間、毎日出し続けた便りも終わりとなります。便りで一番大変なときは、貧血で市立病院に入院したときです。入院中も毎日病院からメッセージを書きました。便りをとぎれさせたくなかったため、全身麻酔をされた検査後に意識朦朧の中で書いた便りが思い出の一つとなっています。生徒と生活していればさまざまな書き留めておきたい出来事があるのです。

私は、夢が一つありまして、それは、童話作家になることです。教員生活を通して数々の生徒の純粋な心に触れてきました。教員はブラックな職業と敬遠されることも多く、最近では教員不足と言うことも出てきました。しかし、私は生まれ変わっても教員をやりたいと思っています。生徒からたくさんの感動をもらうことができるからです。学年主任になってからは、少なくなりましたが、担任をしていたときは、常に生徒と感動して学校生活を送っていた日々だったと思います。担任に本音をぶつけてくる生徒に本音で自分の考えを返していました。

暴走族に入って、登校も少なくなったA男のところに何回も家庭訪問しました。ある日「先生、俺はまた教室に戻りたい。先生のクラスに戻りたい」と真剣に私に相談してきました。「学校に戻りなよ。待ってるよ。一緒に頑張ろう」と励ますと「抜けられないよ。抜けるときに何されるかわからない。殺されるかも」と怯えていました。「そんなことないよ。殴られるぐらいだよ。命は取られないよ」と説得すると「先生、俺は抜きたいけど怖いです。助けて」と下を向いてしまいました。「二度と暴走族とかに入らないよね。まじめに中学校で頑張れるよね」と私は、A男に聞きました。「まじめにやるよ」とすがるように私の顔を見てきました。「先生が、暴走族と話を付けてあげるよ。暴走族のリーダーと話してみるよ」とA男と約束しました。

私は、逗子市内で勢力を持っていた横浜連合系の暴走族グループのリーダーと給料日の日に話し合うことになりました。私もまだ、二十代だったので、そのリーダーとは同じような年でした。飲み屋さんを貸し切って、リーダーとチームの人達と私は話しました。「私のクラスのA男が暴走族をやめたいと言ってるので、抜けさせて欲しい」と私が話すと「先生の出る幕ではないよ。そいつの問題だよ。A男を呼んで来いよ」と迫られました。「君たちの言い分はわかる、しかし、私は教師です。A男の担任です。お願いだ、必ずまじめにさせるから暴走族から抜けることを認めて欲しい」と私は、頭を下げました。その日のお店の飲み代はすべて私が支払うことになりました。私は、その月の給料袋をお店に出しました。話は、平行線が続きましたが、「先生は、なぜそこまでA男に関わるのか？かっこつけて話しているようだが、最終的にA男の代わりに先生がリンチを受けることができるのか？」と私の意志を確認してきました。「私は、A男の担任だから、A男を学校で頑張らせたい。ただそれだけ。私は教師だから…私がリンチを受けて終わるならそれで良い。」とリーダーに告げました。「先生、もういいよ。わかったよ」と暴走族のリーダーは「先生は本当に先生なんだね」と笑いました。

A男もその後は、まじめに生活をして学校を卒業しました。そんなさまざまな生徒との関わりの中で、何よりも輝いていた生徒の心を小説の一つひとつとまとめていきたいなと思っています。出版したら是非読んでみてくださいね。

